

様 式 C - 1 9、F - 1 9 - 1、Z - 1 9 (共通)

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：3 2 6 2 1

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016 ~ 2019

課題番号：1 6 K 0 4 1 8 4

研究課題名 (和文) 自助集団のスピリチュアリティと土着の知の融合：通俗心理学の言説に対抗して

研究課題名 (英文) Fusion of Self-Help Group Spirituality and Indigenous Knowledge: Challenging the Discourse of Popular Psychology

研究代表者

岡 知史 (Oka, Tomofumi)

上智大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：5 0 1 9 4 3 2 9

交付決定額 (研究期間全体) : (直接経費) 3,400,000 円

研究成果の概要 (和文) : 自助グループは、類似の状況にある当事者がその体験を分かち合うことによって蓄積されていく体験的知識を用いることによって機能していくと理解されてきた。その体験的知識は、専門職による専門的知識と、一般市民の素人的知識との対比で論じられてきたが、実際にはその区別は容易ではない。本研究は、その体験的知識がさらに二つの知識、すなわち通俗心理学と土着の知 (あるいは宗教の知) を源泉にしていることを示した。また地方行政の関与、専門職との協働関係、伝統宗教の衰退という社会的要素も自助グループの知識形成に影響を与えていることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自助グループの「体験的知識」は、共通の体験をもつ当事者のわかちあいにより形成され、専門職のもつ専門的知識と異なるものとして理解されてきた。しかしながら実際には、その区別は容易ではない。当事者が生活する空間には、すでに通俗心理学に基づく知識や土着の知が堆積し、それとの区別もつきにくい。本研究は自助グループの体験的知識の純粋性に疑問を投げかけ、この概念のさらなる吟味の必要性を訴えたことに意義がある。

研究成果の概要 (英文) : Self-help groups have been understood to work with experiential knowledge, which is accumulated through the exchange of experiences by people in similar conditions. Their experiential knowledge has been discussed in comparison with professional knowledge and with lay knowledge. These three kinds of knowledge are not exclusive to each other. The purpose of my research was to expand our understanding of the experiential knowledge base of self-help groups by including two additional knowledge sources: popular psychology and indigenous/religious knowledge. The discussion includes three influential social factors: the legitimization by local government, the alliance between self-help groups and professionals, and the declining religious rites as containers of indigenous knowledge. My research implies we should be wary of the nature of the experiential knowledge of self-help groups, which is greatly influenced by socio-cultural factors unrelated to their members' experiences.

研究分野：社会福祉学

キーワード：自助グル - プ スピリチュアリティ 土着の知 通俗心理学

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1．研究開始当初の背景

自助集団の「知」は「体験的知識」であり、その「体験的知識」は、専門職による「専門的知識」と対比されて論じられるのが、1970年代から続く自助グループの研究の定説であった。しかし、インターネットの普及等により、知のありかたが大きく変わった。一般市民であっても多種多様な知にアクセスできるようになった。このような時代において自助集団の知についてより深く考察することが必要であると考えた。

2．研究の目的

自助集団の知の構造を、二つの自助集団を事例としてとりあげ、自助集団のスピリチュアリティと「土着の知」の融合の形を通俗心理学の疑似科学的言説への対抗軸として描くことが目的であった。集団は通俗心理学に攻撃的であり、逆に集団 B は通俗心理学により融和的であり、そこには対照的な姿勢が見られるが、両者ともに日本仏教的スピリチュアリティを中核に含んでいて、それを比較しつつ描写することは、日本の固有の文化に根ざした自助集団の研究の大きな進展につながると考えた。

3．研究の方法

研究代表者が以前からフィールドとしている自助集団のうち、半世紀以上にわたって活動している歴史ある集団 A と、まだ自助集団としては新しい集団 B を事例として取り上げ、そのリーダー層へのインタビュー、集団活動への参与的観察、集団が発行する機関紙等、文書の分析を主な研究方法とした。

4．研究成果

自助集団の体験的知識は、従来の研究では、当事者の体験から得られた知識の蓄積であり、学術的に蓄積されてきた専門的知識との対比で論じられてきた。しかし、今回の研究によりそのような分け方には下記のような多くの問題があることが明らかになった。

- 1) 自助集団を構成している当事者は、専門職が用いる専門的な用語を多く学んでおり、自らの体験も、そのような用語を用いて語られており、体験的知識と専門的知識の融合が広く見られる。どこからどこまでが体験的知識なのか、明確ではないのである。
- 2) 従来の自助集団の研究では、専門的知識は学術的な研究に裏付けられている知識であるという前提があったが、自助集団が焦点を当てている問題あるいは生活状況は人口比でいえば、かなり少数の人々しか体験していないことであり、自治体行政に勤務している専門職、あるいは地域で開業している専門職が、学術的な研究に裏付けられた知識をもっていることはほとんど期待できない。したがって専門職が持っている知識が、従来からいわれている「専門的知識」であることは、希だといってよい。
- 3) 上記のことから言えることは、自助集団の周辺には、学術的な研究に裏付けられた知識という意味での「専門的知識」は不在であるということであり、その空白を埋めるために集団あるいは（ヒエラルキー的構造をもつ）組織としての専門職がもつ文化や伝統がある。その文化あるいは伝統的考え方のひとつが「医療化」である。医療化は、専門職を対象者に対して優位の位置に押し上げる。なぜなら医療化というパラダイムにおいて、専門職は、専門職しか持ち得ない知識によって、対象者の問題を解決できることを約束するからである。
- 4) 自助集団は、上記のような伝統をもつ専門職集団との関係を考慮して「医療化」を受け入れることがある。その結果、自らの生活状況の「病理化」を受け入れ、それが自助集団の（発展史の原点にある）スピリチュアリティの忘却化につながっていると考えられた。自助集団のスピリチュアリティは、個を超え、他者と連帯していくエネルギーになるはずなのだが、自らの状態を「病理」と捉えるところからは、健全なスピリチュアリティは発現されない。このことは自助集団の運動の衰退につながっていくと考えられた。
- 5) スピリチュアリティは、それを自助集団が真剣に取り上げるほどの概念にはなっていない。霊性と訳されることがあるが、全く受け入れられていない。一方で「スピリチュアル市場」が日本では広がっているとされ、スピリチュアリティに対する偏った理解が日本社会に広がっている。集団 A においてはスピリチュアリティは「洗練されない時代遅れ」のものであり、嘲笑的にされる場合すらある。また集団 B においては土着的な文化に属することであり、当然のこととしてやはり自助集団の重要な関心事とはなっていなかった。研究代表者としては自助集団の研究は、参加的アクションリサーチで行うことが望ましいと考えたが、スピリチュアリティは先述の理由からアクションリサーチの対象とはなることは難しかった。

- 6) 「専門的知識」の不在は、専門職の間に学術的な裏付けはないものの学術的な色彩を帯びた「通俗心理学」の蔓延を招いている部分がある。自治体行政としては対策のために何らかのプログラムを実施しなければいけない義務があるが、誰もその「専門的知識」をもった人が部署にいないとなれば、外部から講師を招くことになる。その講師に何ら学術的な功績もなく学術的な訓練を受けたことがなくても、社会的に（政治的に）公認された団体の関係者であれば「専門家」として受け入れられ、その「専門家」が語る「通俗心理学」が「専門的知識」として流布される結果となっている。

以上をまとめると、自助集団の研究の主流として言われてきた体験的知識と専門的知識の二分法は、かなり疑わしいといえる。自助集団の知識についてさらなる研究が必要であろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Tomofumi Oka, Nur Atikah Mohamed Hussin, & Anneli Silven Hagstrom	4. 巻 なし
2. 論文標題 The Diversity of Indigenous Wisdom on Grief: Exploring Social Work Approaches to Bereavement	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The IAFOR International Conference on the Social Sciences: Hawaii 2017 Official Conference Proceedings	6. 最初と最後の頁 53-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件／うち国際学会 9件）

1. 発表者名 Tomofumi Oka
2. 発表標題 The knowledge base of self-help groups in Japan: Experience, popular psychology, and indigenous/religious knowledge
3. 学会等名 the 3rd International Social Development Conference（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomofumi Oka
2. 発表標題 Spirituality as a third essential element of Japanese self-help groups
3. 学会等名 The Joint World Conference on Social Work, Education and Social Development 2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomofumi Oka
2. 発表標題 Practice research with leaders of self-help groups: Empowering people through knowledge production
3. 学会等名 4th International Conference on Practice Research（国際学会）
4. 発表年 2017年

1 . 発表者名 Tomofumi Oka
2 . 発表標題 Developing Experiential Knowledge of Self-Help Groups under the Influence of Professional and Indigenous Knowledges
3 . 学会等名 16th Biennial Conference of the Society for Community Research and Action (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Tomofumi Oka, & Nur Atikah Mohamed Hussin
2 . 発表標題 Spirituality and Indigenous Social Work: A Cross-Cultural Study of Muslim Malaysia and Buddhist Japan
3 . 学会等名 Borneo International Social Work Symposium 2017 (国際学会)
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Tomofumi Oka
2 . 発表標題 Conducting phenomenological research on self-help groups: How to understand an experience that you do not share?
3 . 学会等名 the Qualitative Report's 9th Annual Conference (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Nur Atikah Mohamed Hussin, & Tomofumi Oka
2 . 発表標題 A comparative Cultural Literature Review of Bereavement and Social Work with Malay Muslims and Japanese Buddhists
3 . 学会等名 Progressive Connexions, 1st Global Conference, The End of Life Experience: Dying, Death and Culture in the 21st Century (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomofumi Oka
2. 発表標題 Equal Partnership, Indigenous Wisdom, and Readiness to Respond: Working with Self-Help Groups
3. 学会等名 8th International Conference on Social Work in Health and Mental Health (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Tomofumi Oka
2. 発表標題 An Application of Indigenous Japanese Knowledge to Family Survivors of Suicide: An Intervention Informed by the Global Definition of Social Work
3. 学会等名 8th International Conference on Social Work in Health and Mental Health (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----